

百物語

森鷗外

青空文庫

何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びた年の当日であつたかと思う。余程年も立つていたので、記憶が稍おぼろげになつてはいるが又却てそれが為めに、或る廉々がアクサンチユエエせられて、翳^{かす}んだ、濁つた、しかも強い色に彩^{いろど}られて、古びた想像のしまつてある、僕の脳髓の物置の隅^{すみ}に転^{ころ}がつている。

勿^{もちろん}論生れて始ての事であつたが、これから後も先^まずそんな事は無さそうだから、生涯に只^{ただ}一度の出来事に出くわしたのだと云つて好かろう。それは僕が百物語の催しに行つた事である。

小説に説明をしてはならないのだそうだが、自惚^{うぬぼれ}は誰にもあるもので、この話でも万一ヨオロッパのどの国かの語に翻譯せら

れて、世界の文学の仲間入をするような事があつた時、余所よその読者に分らないだろうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり説明を以てもつこの小説を書きはじめる。百物語とは多勢の人が集まって、蠟燭ろうそくを百本立てて置いて、一人が一つずつ化物ばけものの話をして、一本ずつ蠟燭を消して行くのだそうだ。そうすると百本目の蠟燭が消された時、真の化物が出ると云うことである。事によつたら例のファキイルと云う奴やつがアルラ・アルラを唱えて、頭を掉ふっているうちに、覲面てきめんに神を見るように、神経に刺し戟げきを加えて行つて、一時幻視幻聴を起すに至るのではあるまいか。僕をこの催しに誘い出したのは、写真を道楽しとみにしている薮君と云う人であつた。いつも身綺麗みぎれいにされていて、衣類や持物に、その

時々おの流行を趁おっている。或時僕が脚本の試みをしているのを見てこんな事を言った。「どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違っています。ちよいちよい芝居を御覧になったら好いでしょう」これは親切に言ってくれたのであるが、こつちが却つてその勝手を破壊しようと思つてゐるのだとは、全く気が附いていなかったらしい。僕の試みは試みで終つてしまつて、何等の成功をも見なかったが、後継者は段々勝手の違つた物を出し出しして、芝居の面目が今ではだいぶ改まりそうになつて来ている。つまり振ねれた、時代を超絶したような考は持つてもいず、解せようともしなかつたのが、薀君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつた交まじわりが絶えてから、もう久しくなつてゐるが、僕はあの人の飽く

まで穩健な、目前に提供せられる受用を、程好く享受していると云う風の生活を、今でも羨ましく思っている。薮君は下町の若^{わかだ}旦那^{んな}の中で、最も聡明^{そうめい}な一人であつたと云つて好^よかろう。

この薮君が僕の内へ来たのは、川開きの前日の午過ぎ^{ひるす}であつた。あすの川開きに、両国を跡^{あと}に見て、川上へ上つて、寺島で百物語の催しをしようと云うのだが、行つて見ぬかと云う。主人は誰だ。案内もないに、行つても好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋^{しかまや}さんが催すのです。だいぶ大勢の積りだし、不参の人もありそうだから、飛入をしても構わないのですが、それでは徳義上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云うかも知れない。しかし二三日前に逢^あつた時、あなたにはわたくしから話をして見て、来

られるようなら、お連申つれすかも知れないと、勝兵衛しょうべえさんにことわつてあります。わたくしが一しよに行くとか好いが、外ほかへ廻つて行かなくてはならないから、一足先きへ御免ごうむを蒙ります」との事であつた。

時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度外に用事もないので、まあ、どんな事をするか行つて見ようと云う位の好奇心を出して、約束の三時半頃に、柳橋の船宿へ行つて見た。天気はまだ少し蒸暑いが、余り強くない南風が吹いていて、凌しのぎ好かつた。船宿は今取り払われた河岸かしで、丁度亀清かめせいの向側むこうがわになつていた。多分増田屋であつたかと思う。

こう云う日に目貫めぬきの位置にある船宿一軒を借切りにしたものと

見えて、しかもその家は近所の雑沓ざつとうよりも雑沓ざつとうしている。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けている。僕は人の案内するままに二階へ升のぼつて、一間ひとまを見渡したが、どれもこれも知らぬ顔の男ばかりの中に、鬚ひげの白い依田よだ学海さんが、紺こん紺がすりの銘めい銘せん撰せんの着流しに、薄羽織を引っ掛けて据わっていた。依田さんの前には、大層身綺麗きれいにしている、少し太った青年が恭しげに据わつて、話をしている。僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たつた所に割り込んだ。簾すだね越しに川風が吹き込んで、人の込み合っている割に暑くはなかった。

僕は暫しばらく依田さんと青年との対話を聞いているうちに、その青年が壮士俳優だと云うことを知った。俳優は依田さんの意を迎え

て、「なんでもこれからの俳優は書見をいたさなくてはなりません」などと云っている。そしてそう云っている態度と、読書と云うものが、この上もない不調和に思われるので、僕はおせっかいながら、傍^{そば}で聞いていて微笑せざることを得なかった。同時に僕には書見という詞^{ことば}が、極めて滑稽^{こっけい}な記憶を呼び醒^{さま}した。それは昔どこやうで旧俳優のした世話物を見た中に、色若衆のような役をしている役者が、「どれ、書見をいたそうか」と云って、見台を引き寄せた事であつた。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出るようになっていた。その若衆のしらじらしい、どうしても本の読めそうにない態度が、書見と云う和製の漢語にひどく好く適合していたが、この滑稽を舞台の外で、今繰り返し

て見せられたように、僕は思ったのである。

そのうち僕はこう云う事に気が附いた。しらじらしいのは依田さんに対する壮士俳優の話ばかりではない。この二階に集まった大勢の人は、一体に詞少なで、それがたまたま何か言うと、皆しらじらしい。同一の人が同一の場所へしょうだい請待した客でありながら、乗合馬車や渡船の中で落ち合った人と同じで、一人一人の間になんの共通点もない。ここかしこで互に何か言うのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻った時計を振ると、セコンドがちよつと動き出して、すぐに又止まるように、こんな会話は長くは持たない。たちま忽ち元の沈黙に返ってしまうのである。

僕は依田さんに何か言おうかと思ったが、どうもやはりしらじ

らしい事しきや思い附かないので、言い出さずにしまった。そしてそこ等の人の顔を眺^{なが}めていた。どの客もてんでに勝手な事を考えているらしい。百物語と云うものに呼ばれては来たものの、その百物語は過ぎ去った世の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くなつて、只空^{むなし}き名が残っているに過ぎない。客^{かつかん}觀的に元から幽霊は幽霊であつたのだが、昔それに無い内容を嘘^ふき入れて、有りそうにした主觀までが、今は消え失せてしまつてゐる。怪談だの百物語だのと云うものの全体が、イブセンの所謂^{いわゆる}幽霊になつてしまつてゐる。それだから人を引き附ける力がない。客がてんでに勝手な事を考えるのを妨げる力がない。

人も我もぼんやりしている処へ、世話人らしい男が来て、舟へ

案内した。この船宿の棧橋さんばしばかりに屋根船が五六艘そう着いている。それへ階上階下から人が出て乗り込む。中には友禪ゆうぜんの赤い袖がちら附いて、「一しよに乗りたいわよ、こつちへお出いでよ」と友を誘うお酌の甲かんばし走った声がする。しかし客は大抵男ばかりで、女は余り交っていないらしい。皆乗り込んでしまうまで、僕は主人の飾磨屋がどこにいるか知らずにしまった。又薮君にも逢わなかった。

船宿の二階は、戸は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客の人いきれがしていたが、舟を漕こぎ出すと、すぐ極好ごくこうい心持に涼しくなった。まだ花火を見る舟は出ないので、川面かわづらは存外ぐわい込み合っていない。僕の乗った舟を漕いでいる四十がっこう恰好の船頭は、

てあか
手垢によごれた根附ねつけの牙彫げぼりのような顔に、極めて真面目まじめな表情を
見せて、器械的に手足を動かしてろあやつを操あやつっている。飾磨屋の事だ
から、定めて祝儀もはずむのだろうに、嬉うれしそうには見えない。
「勝手な馬鹿をするが好い。己おれは舟さえ漕いでいれば済むのだ」
とでも云いたそうである。

僕は薄縁うすべりの上に胡坐あぐらを掻かいて、麦藁帽子むぎわらを脱いで、ハンケ
チを出して額の汗を拭ふきながら、舟の中の人の顔を見渡した。船
宿を出て舟に乗るまでに、外の座敷の客が交つたと見えて、さつ
き見なかった顔がだいぶある。依田さんは別の舟に乗ったと見え
て、とうとう知った顔が一人もなくなった。そしてその知らない、
幾つかの顔が、やはり二階で見た時のように、ぼんやりして、て

んでに勝手な事を考えているらしい。

舟には酒肴しゅこうが出してあつたが、一々どの舟へも、主人側のもの

を配ると云うような、細かい計画はしてなかったのか、世話を

焼さかいて杯さかずきを侑めるものもない。こう云う時の習ならいとして、最初は一

同遠慮ゆうりょをして酒肴に手を出さずに、只睨にらみ合っていた。そのうち

結城紬ゆうきつむぎの単物ひとえものに、縞紹しまろの羽織を着た、五十恰好の赤ら顔の

男が、「どうです、皆さん、切角出してあるものですから」と云

つて、杯を手にとると、方方から手が出て、杯を取る。割箸わりばしを

取る。盛んに飲食が始まった。しかし話はやはり時候の挨拶位の

ものである。「どうです。こう天気続きでは、米が出来ますでし

ようなあ」「さようさ。又米が安過ぎて不景氣と云うような事に

なるでしょう」「そいつあ愜かないませんぜ。鶴亀つるかめ鶴亀「こんな対話である。

僕のいる所からは、すぐ前を漕いで行く舟の艫ともの方が見える。そこにはお酌が二人乗っている。傍そばに頭を五分刈にして、織地のままの繭けんちゆう紬かげもんつきの陰紋附に袴はかまを穿いて、羽織を着ないでいる、能役者のような男がいて、何やら言ってお酌を揶揄からかうらしく、きやつきやと云わせている。

舟は西河岸の方に倚よつて上のぼつて行くので、廐橋うまやばし手前しまえまでは、お蔵くらの水門の外を通る度たびに、さして来る潮に淀よどむ水の面おもてに、藁わらやら、鉋かんなくず屑くずやら、傘かさの骨やら、お丸のこわれたのやらが浮いていて、その間に何事にも頓とんちやく着せぬと云う風をして、鷗かもめが波に

揺られていた。諏訪町河岸のあたりから、舟が少し中流に出た。すわちようがし

あづまばし 吾妻橋の上には、人がだいぶ立ち止まって川を見卸していたが、

その中に書生がいて、丁度僕の乗っている舟の通る時、大声に

「馬鹿ばか」とどなった。

舟の着いたのは、木母寺辺であつたかと思う。もくぼし 生憎風がぱつ

たり歇やんでいて、岸に生えている葦あしの葉が少しも動かない。向河

岸の方を見ると、水蒸気に飽いた、灰色の空気が、橋場の人家の

輪廓りんかくをぼかしていた。土手下から水際みずぎわまで、狭い一本道の附

いている処へ、かわるがわる舟を寄せて、先ず履物はきものを陸おかへ揚げ

た。どの舟もどの舟も、載せられるだけ大勢の人を載せて来たの

で、お酌の小さい雪蹈せったなどは見附かつて、客の多数の穿いて来

た、世間並の駒下駄こまげたは、鑑定が容易に附かない。真面目な人が跣は足だしで下りて、あれかこれかと捜しているうちに、無頓着な人は好い加減なのを穿いて行く。中には横おうちやく着で新しそうなものを選よつて穿く人もある。僕はしかたがないからなるべく跡まで待つて、残った下駄を穿いたところが、齒ななめの斜に踏み耗へらされた、随分歩きにくい下駄であつた。後に聞けば、飾磨屋が履物の間違つた話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈つたが、僕なんぞには不躰ぶしつけだと云う遠慮から、この贈物をしなかつたそうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がいて案内をしたのだろう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を捜したりなんかして、まだ行つてしまわないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そし

て狭い道を土手へ上がつて、土手の内の田圃たんぼを、寺島村の誰やらの別荘をさして行く。その客の群は切れたり続いたりはあるが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失うようなことはない。僕も齒の歪ゆがんだ下駄を引き摩ずりながら、田の畔くろや生垣いけがきの間の道を歩いて、とうとう目的地に到着した。

ここまで来る道で、幾らも見えたような、小さい屋敷である。高い生垣めぐを繞めぐらして、冠木門かぶきもんが立ててある。それを這入はいると、向うに煤すすけたような古家の玄関が見えているが、そこまで行く間が、左右を外そと囲こいよりずっと低いかなめ垣しきで為切しきつた道になつていて、長方形の花崗石みかげいしが飛び飛びに敷いてある。僕に背中を見せて歩いていて、偶然の先導者はもう無事に玄関近くまで行つてい

る頃、門と、玄関との中程で、左側のかなめ垣がとぎれている間から、お酌が二人手を引き合つて、「こわかつたわねえ」と、首を縮めて^{ささや}呟き合いながら出て来た。僕は「何があるのだい」と云つたが、二人は同時に僕の顔を不遠慮に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとでも云いたそうな、極く愛相のない表情をして、玄関の方へ行つてしまった。僕はふいと馬鹿げた事を考えた。昔の名君は一^{いっぴん}顰一笑を惜んだそうだが、こいつ等はもう只で笑わないだけの修行をしているなと思つたのである。そんな事を考えながら、格別今女の子のこわがつた物の正体を確かめたいと云う熱心もなく、垣のとぎれた所から、ちよつと横に這入つて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不断は植木鉢^{うえきばち}や箒^{ほうき}でも入れて

ありそうな、小さい物置があつた。もう物蔭は少し薄暗くなつていて、物置の奥がはつきり見えないのを、覗^{のぞ}き込むようにして見ると、髪を長く垂れた、等身大の幽霊の首に白い着物を着せたのが、萱^{かや}か何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄^よ席^せに出る怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつていた、出来合の幽霊である。百物語のアヴァン・グウはこんな物かと、稍^{やや}馬鹿にせられたような気がして、僕は引き返した。

玄関に上がる時に見ると、上がつてすぐ突き当る三畳には、男が二人立つて何か忙がしそうに呟き合つていた。「どうしやがつたのだなあ」「それだからおいらが蠟燭は舟で来る人なんぞに持

せて来ては行けないと云ったのだ。差当り燭台しよくだいに立ててあるのしきやないのだから」と云うような事を言っている。樂屋の方の世話も焼いている人達であろう。二人は僕の立っているのには構わずに、奥へ這入ってしまう。入り替って、一人の男が覗いて見て、黙って又引つ込んでしまう。

僕はどうかと思つて、暫く立ち竦すくんでいたが、右の方の唐紙からかみが明いている、その先きに人声がするので、その方へ行つて見た。そこは十四畳ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠どうろうがあつたり、泉水があつたりする庭を見晴している。この座敷にもう二十人以上の客が詰め掛けている。やはり船宿や舟の中と同じ様に、余り話はずんでいない。

どの顔を見ても、物を期待しているとか、好奇心を持っているとか云うような、緊張した表情をしているものはない。

丁度僕が這入った時、入口に近い所にいる、髯ひげの長い、紗しゃの道みち行ちゆき触ふりを着た中ちゆうじ爺ぢいさんが、「ひどい蚊かですなあ」と云うと、

隣の若い男が、「なに藪蚊やぶかですから、明りを附ける頃にはいなくなつてしまいます」と云うその声が耳馴れているので、顔を見れば、蔀君しとみであつた。蔀君も同時に僕の顔を見附けた。

「やあ。お出いでなさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのでしたね。一寸ちよつと御紹介をしましょう」

こう云つて蔀君は先きに立つて、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手で人を分けるようにして、入口と反対の

側の、格子窓こうしまどのある方へ行く。僕は黙って跡に附いて行つた。

蔀君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と様子の變つた男がいる。しかも随分込み合っている座敷なのに、その人の周囲は空席になつていたので、僕は入口に立っていた時、もうそれが目に附いたのであつた。年は三十位でもあろうか。色の蒼い、長い顔で、髪は刈つてからだいぶ日が立っているらしい。地味な縞しまの、鈍い、薄青い色の勝つた何やらの単物に袴を着けて、少し前まえ屈みになつて据わっている。徹夜をした人の目のように、軽い充血あつとの痕の見える目は、余り周囲の物を見ようとせず、大抵直前すぐまえの方向を凝視している。この男の傍そばには、少し背後うしろへ下がつて、一人の女が付き添っている。これも支度ぎどくが極地味な好

みで、その頃流行^{はや}った紋織お召の単物も、帯も、帯止も、ひたすら目立たないようにと心掛けているらしく、薄い鼠が根調をなしていて、二十^{はたち}になるかならぬ女の装飾としては、殆ど異様^{ほとん}に思われる程である。中肉中背で、可哀らしい円顔をしている。銀杏^{いちよう}返しに結つて、体中で外にない赤い色をしている六分珠^{ろくぶだま}の金^{きん}釵^{かん}を挿^さした、たつぷりある髪の毛の、鬢^{びん}のおくれ毛が、俯向^{うつむ}いている片頬^{かたほ}に掛かつている。好い女ではあるが、どここと云つて鋭い、際立つた線もなく、凄^{すげ}いような処もない。僕は一寸見た時から、この男の傍にこの女のいるのを、只何となく病人に看護婦が附いているように感じたのである。

蔀君が僕をこの男の前に連れて行つて、僕の名を言うと、この

男は僕を一寸見て、黙って丁寧に辞儀をただけであつた。蔀君はそこらにいた誰やらと話をし出したので、僕はひとり縁側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かった、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云う人の事を考えた。

今紀文いまきぶんだと評判せられて、あらゆる豪遊をすることが、新聞の三面に出るようになってからもうだいぶ久しくなる。きょうの百物語の催しなんぞでからが、いかにも思い切つて奇抜な、時代の風尚にも、社会の状態にも頓着とんじゃくしない、大胆な所作しよさだと云わなくてはなるまい。

もとより原來百物語に人を呼んで、どんな事をするだろうかと云う、

僕の好奇心には、そう云う事をする男は、どんな男だろうかと云

う好奇心も多少手伝っていたのである。僕は慥たしかに空想で飾磨屋と云う男を画き出していたには違いないが、そんならどんな風をしている男だと想像していたかと云うと、僕もそれをはつきりとは言うことが出来ない。しかし不遠慮に言えば、百物語の催主が氣違染じみた人物であつたなら、どっちかと云えば、必ず躁そうきよう狂きやうに近い間違方だろうとだけは思っていた。今実際にみたような沈ちん鬱んうつな人物であろうとは、決して思っていなかった。この時よりずっと後になって、僕はゴリキイのフォマ・ゴルジエフを読んだが、若もしきようあのフォマのように、飾磨屋が客を攫つかまえて、隅田川へ投げ込んだって、僕は今見たその風采ふうさいほど意外には思わなかったかも知れない。

飾磨屋は一体どう云う男だろう。錯雑した家族的關係やなんか、新聞に出たこともあり、友達の噂うわさばなし話で耳に入つたこともあつたが、僕はそんな事に興味を感じないので、格別心に留めずにした。しかしこの人が何かの原因から煩悶はんもんした人、若くは今もしている人だと云うことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼けになつて、豪遊をすると、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依つて意識をぼかしていようとするものである。そう云う人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違ふようだ。一体あの沈鬱なような態度は何に根ざしているだろう。あの目の血走っているのも、事によつたら酒と色とに夜を更ふかした為めではなくて、深い物思に夜を穩おだやか

に眠ることの出来なかつた為めではあるまいか。強^しいて推察して見れば、この百物語の催しなんども、主人は馬鹿げた事だと云うことを飽くまで知り抜いていて、そこへ寄つて来る客の、或^{ある}は酒食を貪^{むさぼ}る念に駆られて来たり、或はまた迷信の霧に理性を鎖^{とぎ}されていて、こわい物見たさの穉^{おさな}い好奇心に動かされて来たりするのを、あの血系の通っている、マリシヨオな、デモニツクなようにも見れば見られる目で、冷^{ひやや}かに見ているのではあるまいか。こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考えれば考えるほど、飾磨屋という男が面白い研究の対象になるように感じた。

僕はこう云う風に、飾磨屋と云う男の事を考えると同時に、どうもこの男に附いている女の事を考えずにはいられなかつた。

飾磨屋の馴染^{なじみ}は太郎だと云うことは、もう全国に知れ渡っている。しかしそれよりも深く人心に銘記せられているのは、太郎が東京で最も美しい芸者だと云う事であつた。尾崎紅葉君が頬杖^{ほおづえ}を衝^ついた写真を写した時、あれは太郎の真似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の写真は世間に広まっていたのである。その紅葉君で思い出したが、僕はこの芸者をきよう始めて見たのではない。

この時より二年程前かと思う。湖月に宴会があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社^{けんゆうしゃ}の人達が、客の中で最多数を占めていた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もうだいぶ更けていて、紅葉君は火鉢^{ひばち}の傍^{わき}へ、肱枕^{ひじまくら}をして寐^ねてしまった。

もつと

たぬきねいり

尤も紅葉君は折々狸寐入たぬきねいりをする人であつたから、本当に寐ねていたかどうか知らない。僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を着ているのに、黒羽二重くろはぶたえの紋付と云う異様な出立いでたちをした長田秋濤君が床柱に寄り掛かつて、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わっている若い芸者と話をしていた。その芸者は少し体を屈めて据わつて、沈んだ調子の静かな声で、只の娘らしい話振をしていたが、島田に結った髪の毛や、頬のふつくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、「君まだ太郎を知らないのですか」と、その人がさも驚いたような返事をした。

太郎が芸者らしくないと云う感じは、その時から僕にはあつた

のだが、きょう見ればだいぶ変っている。それでもやはり芸者らしくはない。先きの無邪気な、娘らしい処はもうなくなつて、その時つつましい中にも始終見せていた笑顔が、今はめつたに見られそうにもなくなっている。一体あんなに飽くまで身綺麗にして、巧者に着物を着こなしているのに、なぜ芸者らしく見えないのだろう。そんならあの姿が意気な奥様らしいと云おうか。それも適当ではない。どうも僕にはやはりさつき這入った時の第一の印象が付き纏まとつていてならない。それはふと見て病人と看護婦のようだと思つた。あの刹那せつなの印象である。

僕がぼんやりして縁側に立っている間に、背後うしろの座敷には燭台が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯ガスも寺島村には引いてな

かつたが、わざわざランプを廃めて蠟燭にしたのは、今宵の特別な趣向であつたのだろう。

燭台が並んだと思うと、跡から大きな盥が運ばれた。中には鮎が盛つてある。道行触のおじさんが、「いや、これは御趣向」

と云うと、傍にいた若い男が「湯灌の盥と云う心持ですね」と注

釈を加えた。すぐに跡から小形の手桶に柄杓を投げ入れたのを

持つて出た。手桶からは湯気が立っている。先つきの若い男が

「や、あかおけ闕伽桶」と叫んだ。いわゆる所謂闕伽桶の中には、番茶が麻の囊

に入れて漬けてあつたのである。

この時玄関で見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の真ん中に据わつて「一寸皆様に申し上げます」と冒頭を置いて、口上

めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて済まないが、並^{なみ}の飯の方を好む人は、もう折詰の支度もしてあるから、別間の方へ来て貰いたいと云う事であつた。一同鮓を食つて茶を飲んだ。

僕には蓐君が半紙に取り分けて、持つて来てくれたので、僕は敷居の上にしゃがんで食つた。「お茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と蓐君は言いわけをするように云つて置いて、茶を取りに立つた。しかしそんな言いわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を気にする程、細かく尖^{とが}つた神経を持つてはいないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなつていなかった、いやいや、やはり夫婦と云いたい、主人夫婦から目を離していたのは、

座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考えていた間だけであつた。座敷を見ている間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出来なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かずにじつとしてゐる。袴の襷ひだを崩くずさずに、前屈みになつて据わつたまま、主人は誰たれに話をするでもなく、正面を向いて目を据えている。太郎は傍そばに引き添つて、退屈らしい顔もせず、何があつても笑いもせずに、おりおり主人の顔を横から覗いて、機嫌を窺うかがうようにしてゐる。

僕は障子のはずしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしゃがんで、海苔卷のりまきの鮓を頬張りながら、外を見ている振をして、実は絶えず飾磨屋の様子を見ている。一体僕は稟賦ひんぷと習慣との種々

な関係から、どこに出ても傍観者になり勝である。西洋にいた時、
一頃^{ひところ}大そう心易く附き合つた爺いさんの学者があつた。その人は不治の病を持つていたので、生涯無妻で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、
傍^{そば}の一人が僕に舞踏の社交上必要なわけを説明して、是非稽古をしろと云うと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての觀察から、可笑^{おか}しいアネクトオト交りに舞踏の弊害を列^{なら}べ立てて攻撃をした。その時爺いさんは黙つて聞いてしまつて、さてこう云つた。「わたくしは御存じの体ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出来ない舞踏を、人のしているのを見ます度に、なんだかそれをしている人が人間ではないような、神のような心

持がして、只目を睜みはつて視ているばかりでございますよ」と云つた。爺いさんのこう云う時、顔には微笑の淡い影が浮んでいたが、それが決して冷刻な嘲あざけりの微笑ではなかった。僕は生れながらの傍観者と云うことに就いて、深く、深く考えてみた。僕には不治の病はない。僕は生まれながらの傍観者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交上尊卑種々の集会に出て行くようになつた後まで、どんなに感興わの湧き立つた時も、僕はその渦うずまき巻に身を投じて、心しんから楽しんだことがない。僕は人生の活劇の舞台にいたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞台に上らない時は、魚うおが水に住むように、傍観者が傍観者の境さかいに安んじているのだから、僕はその時尤もそ

の所を得ているのである。そう云う心持になつていて、今飾磨屋と云う男を見ているうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢うような心持がして来た。傍観者が傍観者を認めたような心持がしてきた。

僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壮にして鉅きよ万まんの富を譲り受けた時、どう云う志望を懷いだいていたか、どう云う活動を試みたか、それは僕に語る人がなかった。しかし彼が芸人附つきあ合いを盛んにし出して、今紀文と云われるようになってから、もう余程の年とし月つきが立っている。察するに飾磨屋は僕のような、生れながらの傍観者ではなかっただろう。それが今は慥かに傍観者になつてゐる。しかしどうしてなつたのだろうか。よもや西洋で

僕の師友にしていた学者のような、オルガニツクな欠陥が出来たのではあるまい。そうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕そういを受けてそれが癒えずいにいるために、傍觀者になったのではあるまいか。

若しそうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のような催しをするのだろう。世間にはもう飾磨屋の破産を云々うんぬんするものもある。豪遊の名を一時に擅ほしいままにしてから、もうだいぶ久しくなるのだから、内証は或はそうなっているかも知れない。それでいて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になって、人を凌しのぎ世に傲おごった前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度作家が同時に批評家の眼で自分の

作品を見る様に、過ぎ去った栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見ているのではあるまいか。

僕の考は又一転して太郎の上に及んだ。あれは一体どんな女だろう。破産の噂が、殆ど別な世界に栖息していると云つて好い僕なんぞの耳に這入る位であるから、伶俐らしいあの女がそれに気が附かずにいる筈はない。なぜ死期の近い病人の体を蝨が離れるように、あの女は離れないだろう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍観者ではないか。傍観者は女の好んで扱ふ相手ではない。なぜと云うに、生活だの生活の喜だのと云うものは、傍観者の傍では求められないからである。そんなら一体どうしたと云うのだらう。僕の頭には、又病人と看護婦と云う印象が浮んで来た。

女の生涯に取つて、報酬を予期しない看護婦になると云うこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の内容としてしていると云うこと程、大いなる犠牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖に繋がれていてする、イブセンの謂う幽霊に崇^{たた}られていてすると云うなら、別問題であらう。この場合にそれはない。又恋愛の欲望の鞭^{むち}でむちうたれていてすると云うなら、それも別問題であらう。この場合に果してそれがあろうか、少くも疑を挟^{はさ}む余地がある。そうして見ると、財産でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、恋愛でもないとして考えて、僕はあの女の捧げる犠牲のいよいよ大きくなるのに驚かずにはいられなかつたのである。

僕はこんな事を考えて、鮓を食つてしまった跡に、生^{しょうが}姜のへ

がしたのが残っている半紙を手を持ったまま、ぼんやりしてやはり二人の方を見ていた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ来て何か呟くと、これまで殆ど人形のように動かずにいた飾磨屋が、つと起^たつて奥に這入った。太郎もその跡に引き添って這入った。

暫くすると薮君が僕のいる所へ来て、縁側にしゃがんで云った。「今あっちの座敷で弁当を上がっていないすった依田先生が　もう怪談はお預けにして置いて帰ると云われたので、飾磨屋さんは見送りに立ったのです。もう暑くはありませんから、これから障子を立てさせて、狭くても皆さんにここへ集まって貰って、怪談を始めさせるのだそうです」と云った。僕はさつき飾磨屋を始めて見

たとき、あの沈鬱なような表情に気を付け、それからこの男の瞬^{またた}きもせずに、じつとして据わっているのを、稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしているのではないかというような感じを心の底に持っていた。この感じが鋭くなつて、一刹那^{せつな}あの目をデモニツクだとさえ思つたのである。そうであるのに、この感じが、今依田さんを送りに立つたと云うだけの事を、薮君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は薮君には、只自分もそろそろ帰ろうかと思つていと云うことを告げた。僕は最初に、百物語だと云つて、どんな事をするだろうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だろうかと思つた好奇心も、今は大抵満足させられてしまつて、この上雇われた話家の口から 古い怪談を聞こ

うと云う希望は少しも無くなっていたからである。葩君は留めようとしなかった。

改まって主人に 暇いとまごい 乞こをしなくてはならないような席でもなし、集まった客の中には、外に知人もなかったのを幸さいわいに、僕は黙つて起つて、舟から出るとき取り換えられた、齒の斜へに耗へらされた古下駄を穿ないて、ぶらりとこの怪物ばけもの屋敷を出た。少し目の慣れるまで、歩き艱なやんだ夕闇ゆうやみの田圃道みちには、道端みちばたの草の蔭こおろぎでかすが微かに鳴き出していた。

*

*

*

二三日立つてから蔀君に逢ったので、「あれからどうしました」と僕が聞いたら、蔀君がこう云った。「あなたのお帰りになったのは、丁度好い引上時でしたよ。暫く談はなしを聞いているうちに、飾磨屋さんがいなくなつたので聞いて見ると、太郎を連れて二階へ上がつて、蚊屋かやを吊つらせて寐たと云うじやありませんか。失礼な事をして構わないと云うような人ではないのですが、無頓着むとんじやくなので、そんな事をもするのですね」と云った。

傍観者と云うものは、やはり多少人を馬鹿ばかにしているに極きまつていはしないかと僕は思った。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

※底本には、表記の変更に關する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたとある。

…か知ら↓…かしら 此↓かく 彼此↓かれこれ …切り↓…き
り 此↓これ 是↓これ 流石↓さすが 併し↓しかし 切角↓
せつかく 其↓その 大ぶ↓だいぶ …丈↓…だけ 兎角↓とに
かく 所で↓ところで 只管↓ひたすら 迄↓まで 儘↓まま
矢張↓やはり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百物語

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>